

「オオカワヂシャ等自生地の調査」

手賀沼にマシジミとガシャモクを復活させる会

竹中真里子

特定外来生物オオカワヂシャは、在来種カワヂシャと交配し雑種形成をする。それにより全国版レッドデータブックでは、カワヂシャが準絶滅危惧種（NT）に指定されており、近年はオオカワヂシャの大繁殖と駆除について各地から報告されている。

2011年度手賀沼流域フォーラム事業として行われた「大津川河口の清掃」の折に、オオカワヂシャの生息を確認した。約3000m²の土砂堆積地一面に開花し繁茂していた。さらなる拡大も危惧され、今年度、手賀沼および大津川における生息状況について調査を実施した。

【ボートによる沼内の調査】

6月と11月の2回、船外機付きボートで沼内から沼岸と大津川河口砂地の調査を実施した。沼岸および植生帶ではカワヂシャおよびオオカワヂシャは確認されなかった。6月は、大津川河口砂地は水没しており、陸生植物のギシギシが多く、ヤナギが生えていたが、オオカワヂシャは確認されなかった。11月調査では、昨年度とは大きく異なり、オオカワヂシャの生息密度は非常に低く、岸辺にそってナガエツルノゲイトウが高密度で生息していた。

【大津川の岸辺調査】

11月下旬～1月初旬に実施した。

本流の下流～中流の「宮下橋」付近までは、岸辺に生じた土砂堆積地に、オオカワヂシャが大小の群落を形成し、点在し生息していた。さらに鎌ヶ谷市内北部公民館南側から鎌ヶ谷第三中学校へ至る支流でも3箇所で小さな株が確認された。

2011年12月大津川河口土砂堆積地でオオカワヂシャを確認



大津川河口土砂堆積地調査 2012.11.08



下流域の「中の橋」の下流側には、礫間浄化施設に河川水を引き入れるための取水堰があり、2011年3月までは水位が「Y P 2.3m」になっていたが、大震災以降礫間浄化施設が使用されなくなり、取水堰は下りたままで、水位は「Y P 1.3m」となっている。そのため、以前は常に水が流れていた岸辺が露出し、オオカワヂシャの生育好適地となっている。今後さらに繁茂する恐れがあると思われる。

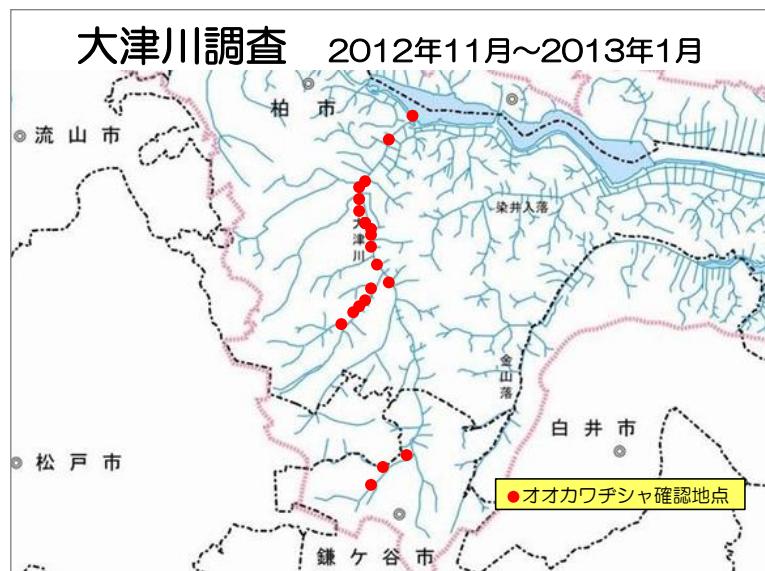
さらに、中流域の「宮下橋」の直上流部で、逆井方面から本流と合流する支流では、水路上に張り出して成長している群落が多数確認され、この支流が下流への主な供給源となっているものと推察された。



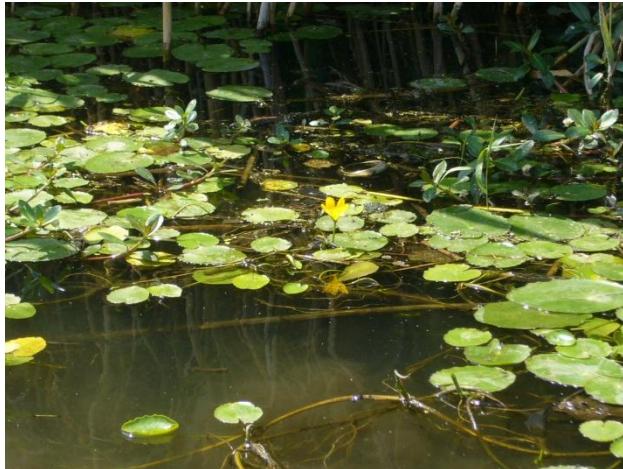
大津川河口付近では、「柏市自然調査報告書(2009年かしわ環境ステーション)」にカワヂシャの生息の報告がある。今回の調査は冬期に行ったため、カワヂシャは確認できなかったが交雑種と思われる株もあった。さらに調査を継続し、大繁殖の前に駆除を検討していきたい。



左：オオカワヂシャ 右：交雑種？



【アザザ、ヒシについて】



6月30日のボートによる調査では、北千葉導水流入口より上流側にアザザを確認した。船頭さんによれば数年前から見られるとのことであったが、11月には確認できなかった。また、北千葉導水流入口の直下流のかつての沈水植物植栽実験場の囲いの中にヒシがびっしりと繁茂していた。しかし、このヒシも11月には全く確認できなかった。現在の手賀沼の環境はこれらの浮葉植物が通年で生育できる環境ではない。

【特定外来種ナガエツルノゲイトウについて】



ナガエツルノゲイトウは、大堀川河口から大津川河口にかけての沼岸では大きな群落が多数形成され、群落が見られない所でもマコモの中に混在して、「ナガエツルノゲイトウがいない所はない」状態になっている。大津川でも、河口から中流部までは幅2.5~5m程度の群落が4箇所で確認され、川の群落の駆除についても早急に対策が必要である。

コメント：千葉県環境研究センター 前水質環境室長 小倉久子 さん

印旛沼のナガエツルノゲイトウの手ごわさを強く感じてきた。その理由は、ナガエツルノゲイトウは水陸両用であること（カラカラのところでも水の中でも生きる）、葉っぱのかけらが一つでもたちまち大群落になること、増殖速度が非常に速いこと（今年1本あったとすると次の年は大群落になる）である。このように、ナガエツルノゲイトウは大変やっかいな状況をもたらしているが、オオカワヂシャは、まだ手遅れにならないうちになんとかなるのではないか。他の川はどうなのか気になる。手賀沼の中の我孫子側にある植生帯にもオオカワヂシャと思われるものがある。今のうちになんとか食い止めないといけない。